

## 「2017年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール参加報告書」

京都大学文学部2年 佐藤慧

正直に言って海外まで出かけるのは面倒といえば面倒なことだが、それに増して有意義なことが多い。その一つの例が、研究における問題意識の発見である。問題意識は研究を進めるうえでの根幹となる部分であり、研究のモチベーションを与えてくれるものだが、自宅と大学の往復ではそれはなかなか見えてこない。普段と異なる社会に身を置くと、様々な違和感を覚えたり、意外な経験をする。特に私のように社会科学を修めようとする人間にとっては、そういうものの中に新しい問題を発見できるチャンスが多いと思う。そして、そのような違和感や意外さを研究に直結できるという点が海外留学のメリットなのだろうということも理解できた。

ではベトナムから持ち帰った「違和感」あるいは「意外さ」や「問題意識」とは何なのか。残念ながら、「問題意識」に関してはまだ言語化することはできないが、前者の一つは資本主義経済の浸透である。私は時間意識や歴史認識といったものに興味があり、戦争続きのベトナムでは過去のどのタイミングを自国の転換点だと考えているのかが興味があった。実際に学生に訊いてみたところ、独立やベトナム戦争勝利よりも1986年の経済開放を重く見る回答が多かった。また人文社会科学大学での講義で、国営テレビがほとんどの番組を民間の制作会社に外注しているという話を聞いた。これらのことは私にとって驚きであり、例えば同様の経済体制をとる中国と比較すると面白いのではないかなどと考えた。

プログラムに参加している間、私が強く意識していたのは、途中で倒れてプログラムを全うできなくなることだけは何としてでも避けたい、ということであった。そのため体調管理には気を配った。衛生面や安全面で気を遣うことが多く、身体よりもむしろ頭のほうが疲れる感覚があったので、特に前半は睡眠時間を長くとりよう心掛けた。

後半の人文社会科学大学での講義が特に面白かった。植民地化から今日まで実に多様なトピックで溢れ返るベトナムの近現代には考えるべき問題が詰まっていると感じた。前半の外国語大学の日本語講座参観もいい経験になったと思う。

今回は非常に多彩なプログラムが用意されていたが、その分目的意識を見失いがちになった。私は先述の通り「ベトナム人の歴史認識を知りたい」ということを一応は考えていたので、授業中の自由時間などに学生に歴史関連の質問をして滞在中のモチベーションを維持した。また、外国語大学の学生から高校の歴史教科書を譲り受けることができたのは望外の幸運であった。

私が今後どのようなテーマで研究をするのかは未定だが、前述のようなベトナムでの経験がテーマ選択に影響を与える可能性は高いと思う。更に言うなら、ベトナムそのものを研究の対象とすることもあり得る。歴史的な側面はさることながら、プログラムを通して親しんだベトナム語にも興味があるからである。